

家族へ

目次

第十章	キーウイの出世	213
第九章	浚深 <small>しんせつ</small> 人夫 <small>にんなん</small> の告白	156
第八章	ふくらむ借金	150
第七章	幽霊船、あらわる	119
第六章	キーウイの亡命生活	
第五章	放蕩 <small>ほうとう</small> 息子	84
第四章	王者エーヴァ	66
第三章	恋するオセオーラ	53
第二章	暗黒の世界の出現	30
第一章	おわりのはじまり	7

	第十一章	エーヴァ、あの世へ行く	228
	第十二章	キーウイ、夜間学校に行く	253
	第十三章	ステイルツヴァイルへようこそ	266
	第十四章	おぼれるまでの連鎖反応	281
	第十五章	助けが来る、そして去る	295
	第十六章	キーウイ・ビッグツリー、世界のヒーロー	325
	第十七章	蝕 <small>しよく</small>	365
	第十八章	キーウイ、カジノに行く	390
	第十九章	音もなくとどろく世界	410
	第二十章	沖のほう	430
	第二十一章	草おんな	447
	第二十二章	キーウイ、空を飛ぶ	463
	第二十三章	おわりがはじまる	478
	謝辞		500
	訳者あとがき		502
参考文献			509

「通りにはだれもないようにみえるわ」とアリスはいった。
「わしもそんな目がほしいものだな」と王さまは不機嫌そうにこたえた。「人がいないことがみえるなんて！ しかもこんなに離れたところから！ この暗さではほんとうにいる人さえよくみえないではないか。」

ルイス・キャロル、『鏡の国のアリス』より

第一章 おわりのはじまり

ママは星明かりのなかでショーをする。だれが思いついたのかは知らないけれど、たぶんチーフだったのだと思う。スポットライトを消してするどい月の光がなにもにもじやまされずに夜空をよこぎるようになる。マイクは切る。ライトにはブリキのまぶたをかぶせて、スタンドの観光客がわたしたちの島の暗さを味わえるようにしてやる。そして〈スワンプランディア！〉のスター、世界に名高いアリゲーターレスラーであるヒローラ・ビッグツリーの呼吸に合わせて、会場全体がおきく息を吸いこむようにしむける。いいアイディアだった。

ママが〈ワニの穴〉の上にかけてられたはしごをのぼるのは週四回。緑のツーピースの水着で飛びこみ板の先っぽに立ち、息をする。風がふいていればママの長い髪は顔のまわりで飛びまわるが、体はじつと動かない。本土のあたりは三十数マイルも離れたこの島まではとどかないから、沼の夜は暗く、気持ち悪いほど星がよくみえる。裸眼でもまんまるな金星やブレイアデス星団の姉妹たちのサファイア色の髪がかんたんにみつげられるのに、ママの体はその輪郭しかみわけられず、ヤシの木についたしみみたいに夜のなかに浮かんでいる。

ヒローラの真下では何十頭ものアリゲーターの群れが、とがったおそろしい顔をつき出して、つ

ららのような歯をはやした上あごを水面にのぞかせながら、濾過された三十万ガロンもの水のなかでひしめきあっている。ママが飛びこんだのはいちばん深いところで、円錐形の池は黒く、水深二十七フィート。いちばん浅い場所では四インチほどの泥水が銅のまざった砂地にうちよせている。プールのまん中にはちいさな鳥がつき出ている、これは水の底からさらい出された石灰岩が四分の一エーカーほど積み上げられたものだけけれど、日中はここにアリゲーターが一度に三十頭もよじのぼり、生きた山をつくってひなたぼっこをする。

〈ワニの穴〉を備えたスタジアムは二六五人の観客を収容できる。プールのまわりを八列の客席が囲み、前のほうの席では座るとちょうど目の高さにワニがみえる。わたしは姉のオセオーラとママのシヨミをみていて、オッシーが身をのりだすと、わたしもおなじように前のめりになった。

入り口には父（チーフ）が書いた注意書きがかけてあった。「前から四列目までの見物人のみなさん、びしょぬれになることを保証します」そのすぐ下にママが怒ったようなちいさな字でこうつけくわえている。「安全は保障しません」

観光客はみんなおしりをポインポインと動かしながら、いたるところから襲ってくる蚊をたたき、太ももにまとわりついてくるカーキズボンやデパートでよくみかけるプリント生地のスカートをひきはがす。そしておたがいに静かにしろといったりぶつかったりのしつたり。カップルはくつつきあつて白い足をうなぎみたいにちぢめてしまい、ビールはこぼれ、子どもは泣く。そこでついにチーフが音楽を鳴らすのだ。古めかしいおおきなスピーカーからトランペットの音がひびき、巨大なスポットライトのみえない目はヤシの木のを探しまわつてついにヒローラの姿をとらえる。その瞬間、ママはわたしたちのママではなくなる。薄い膜が張るように名声が彼女をつつみ、チー

フはマイクに向かって叫ぶ。「お待たせしました、ヒローラ・ビッグツリーの登場です！」飛びこむ前にママが肩甲骨をうしろに持ち上げるのが、つばさのようにみえた。

水は灰色や黒のおおきな体でほとんど埋めつくされているので、ワニをよけるためには空中で微調整しながらかんべきに正確に飛びこまなければならぬ。チーフが投げかけるスポットライトはそこだけ霜がおりたみたいで暗い水面に円を描き、ママはそのなかに入つて泳いでいく。ワニがライトのなかに入ってくるたび、観客は喚声をあげて指さす。マーガリン色に照らされた波に太つたしつぽがとつぜんくねくねと分け入り、怪物のスピード形の頭がママのすぐそばまでせまってくる。ヒローラが平気でライトの円周をかすめて泳いでいくのは、水に浮かべた檻のとびらの開きぐあいをためしているようにみえた。

黒い絹みたいに、水の上にひだが寄る。ヒローラが腕を力強くのばすたび、平泳ぎで水をきつていく音と、息つぎの音がきこえた。ワニの目は赤く燃える石炭のよう。ときどきその赤い両目がチーフのあやつるスポットライトの白い網にひっかかってくる。長い三分間が過ぎる。さらにもう一分。そしてついにヒローラは思いきり息を吸いこみながらステージの東側のはしごをつかむ。彼女が息を吐くと会場全体がいつしよに息を吐く。うちのステージはそんなに立派なものではなくて、六フィートの柱に支えられたイトスギ材の板が、〈ワニの穴〉の上に渡されているだけだった。ヒローラは水から上がり、ふるえる腕をおへそのくぼみの上で組んだまま水を吐き出し、それからちいさく手をふった。

観客は狂ったように拍手を送る。

ふたたびライトがその姿をとらえるとき、ポスターでは「沼のケンタウロス」と称されるヒロー

ラはわたしたちのママにもどつて、筋肉質な体と茶色い肌をして笑っている。三人のママになつてから、ポスターに写っているころよりウエストと腰のあたりがぶあつくなつちやつたわ、とママはよく冗談をいつていた。

「ママ！オッシーとわたしは甲高い声をあげて走っていく。針金のフェンスにそつて、へワニの穴へを取り囲む濡れたセメントの上をいちもくさんに。サインをもとめる観光客にひじで押しつけられる前に。「ママ、勝つたね！」

わたしの家族、テンサウザン諸島のビッグツリー族は、かつてフロリダ州の南西沖、大湿地帯「フロリダ州南部の広大な湿地帯はエバグレイズの名で知られ、亜熱帯の豊かな自然が残されている。その大半は世界遺産に指定されたエバグレイズ国立公園に含まれる」の湾に面した部分にある一〇〇エーカーの島に暮らしていた。長いあいだスワンプランディアーンはこの地方でいちばんのワニのテーマパークでありつづけへスワンプカフエも人気だった。ケープコラルのすぐ南の幹線道路ぞいに、高い料金を払つて看板を出していて、そこにはこう書いてあつた。「セス「旧約聖書に出てくる人の名前。箱船をつくつたノアの先祖とされる」は牙をむくウミヘビ、古代の死のトカゲ!!」

わたしたちはアリゲーターのことを「セス」とよんでいた。(チーフがいうには、「おまえたち、伝統は大切にしないさい。広告をつくりなおすにはお金がかかるんだから」とのことだったので。)看板のなかでは体長十フィートもあるセスが音もなく吠えている。おおきく開いた口からは女王ホ

ラ貝みたいなバラ色の舌をのぞかせ、濡れたうろこは黒光りしている。この原始時代の怪物のまわりに、わたしたち一家は背の順にならんでひざをついている。父のチーフ、祖父のソートウース、母のヒローラ、兄のキーウイ、姉のオセオーラ、そしてわたし。みんなスワンプランディアーンのギフトシヨップから借りてきたインディアンの衣装を着ている。シカ革のベストに布製のヘッドバンド、オオアオサギの羽、オオシロサギの羽、おでこからはずどんとたらしたビーズの束。髪はみつあみにして、首にはワニの牙のネックレスを巻いていた。

セミノール族やミカスキ族の血は一滴も入っていない。なのにチーフは写真を撮るときいつもわたしたちにインディアンの格好をさせた。わたしたちは「わたしたちなりのインディアン」なのだといつて。ママはこんがり焼いたトーストのような肌をしていて、観光客が目を細めればインディアンにみえなくもない。キーウイとおじいちゃん、それにわたしも日焼けはへっちゃらだった。けれどオセオーラだけは雪のような肌をして生まれた。カモミールの花みたいの色白、というわけではない。ほんとうに霜みたいに白い。目はくり色ともすみれ色ともつかないふしぎな色をしている。オセオーラはママにそつくりだったので、ママの顔を白くにごつた水に映したみたいだった。看板のための写真は、ママがドラッグストアで買ってきた頬紅を塗つてやり、チーフがちょうど木陰に入るように立たせて撮つた。オッシーは開拓時代のダゲレオタイプに写っている死にかけの子どもみたいだとキーウイはいう。いそいでシャッターをきらないとこの子はこの世を去つてしまう、と思わせる顔らしい。

へワニの穴ではアリゲーターを九十八頭飼っていた。ほかにも《爬虫類の道》というのがあつて、これはおじいちゃんとチーフが自分たちで設計してつくつたものだ。ヤシの木とソーグラスのなか

を二キロの遊歩道がつづき、カイマンやガビアル、インドニシキヘビ、アフリカニシキヘビ、いろいろな種類のアマガエル、赤いおなかをしたカメの巢、涙を浮かべるアサガオ、それにめずらしいキユーバワニのメトウシエラがいた。メトウシエラは丸太のまねの達人で、この子が動いているのを見たのは白いあごがスーツケースのようにおおきく開いたときだけだ。

ほ乳類も一匹だけいた。フロリダヒグマのジュディ・ガーランドだ。ジュディはまだ湿地帯北部の松林にクマが棲息^{せいそく}していたころ、子グマのときに祖父母に保護されてやってきた。はげかかったジュディの毛皮はこげた毛布みたいに見える、キーウィはクマ脱毛症にかかっているのだといっていた。ジュディは芸（のようなもの）ができた。「虹のかなたに」の曲に合わせてあいづちをうつことをチーフにしこまれたのだ。この芸は例外なくだれにも好かれなかった。彼女の不気味なあいづちをみると、ちいさな子どもはおびえてしまい、親はショックを受けた。「だれか、来て！」と観光客が助けをよぶ。「クマが発作^{はつさく}を起こしたみたい！」ジュディはリズム感がなかったが、手放すわけにはいかなかった。クマも家族なんだから、とチーフはいつていた。

わたしたちのテーパーパークには水上すべり台やミニゴルフに匹敵する魅力があった。まずこのあたりでいちばん安くビールが飲めること。そして雨が降ろうが晴れようが、祝日にも宗教儀礼にもさまたげられずに三六五日、いつでもワニのレスリングショーがみられること。そんなビッグツリー家ももちろん問題を抱えていて、ヘスワンプランディア！はわたしが生まれてからの短いあいだでさえ、自然と大企業からのいくつもの脅威とたたかっていた。たとえば、メラルーカというやつかいな植物。ペーパーパークともよばれるこの木は外来種で、沼の北東の広大な土地から水分をうばっていた。それに巧妙に進められる郊外化と、南のほうで勢力を拡大している砂糖工場にはみ

んなが目を光らせていた。でもいつもわたしたちが勝っているように思えた。なにしろセスとたたかって、一度も負けたことはないのだから。わたしたちが子どもだったころ、土曜日の夜（それに平日の夜もたいいてい）は、ママが「セスとヒローラの水泳対決」を披露して、いつも勝利していた。千回ものショーで、ママは黒い水にせずんではまた上がってきた。千夜ものあいだ、わたしたちはママのはなばなしジャンプのあとで、緑の飛びこみ板が空中できしむのをきいた。

それからママが病気になる。人がこんなにも重い病気になるのは許されてはいけない、というくらいの病気だ。ママの診断が出たときわたしは十二歳で、怒りがこみあげてきたのを覚えている。正義も道理もない。がんの専門医が何人も話しかけてきて、もうどんなことをいつていたかは思い出せないけれど、その話しかたからは希望を読みとることはできなかった。ナースが持つてきてくれた自動販売機のチョコレートはのどにつまった。わたしたちと話すとき、医者はみんなかみこんでいるようにみえたので、その病棟にいたのは七、八フィートもある巨人ばかりだったのかもしれない。ママはおそろしいスピードで末期がんのスロープをどんどんすべり落ちていった。ママには似ても似つかない人になってしまった。頭の皮膚はやわらかくなって毛が抜けて、赤ちゃんの頭みたいだった。ママの顔がだんだんしずみこんでいくのを見た。ある晩ママは飛びこんで、もどつてこなかった。ママが開けた穴は空気におおわれて、ふるえもせず、泡もたらず、ほんとうにもう上がってこないようにみえた。ヒローラ・ジェーン・ビッグツリーは世界レベルのアリゲーターレスラーであり、料理はへたくそで、三児の母であり、ウェストデイヴィーの乾いた土地の、病院のベッドの上で、どんよりした水曜日^{すいようび}に亡くなった。三月十日、午後三時十二分。

おわりのはじまりを生きているとき、それはまん中のようにも感じられる。子どもだったころはこうした展開がなにもみえなかった。「ヘスワンブランドディア!」が敵の手に落ちてから、やっと時間がはじまりとまん中とおわりのあるおはなしの形をとりはじめたのだ。そう、いそがしい人のためにここでこのおはなしを短くまとめておこう——わたしたちの陥落。

「ヘスワンブランドディア!」のおわりがほんとうにはじまったとき、わたしは十三歳になっていた。最初は家族が直面している危機には気づいていなくて、ママをなくしたことが起こりうる最悪のできごとだと思っていた。ひとつの悲劇がまた別の悲劇を生み、まるでコウモリの大群が目を光らせて洞くつからあふれ出てくるようにそれが連鎖的につながっていくなんて、想像さえしていなかった。ママが死んでから九か月。チーフはルーミス郡の地域新聞、ルーミス・レジスターにちいさな死亡記事を載せたきり、観光客にそのことを知らせようとはしていなかった。フロリダのガイドブックにはまだヒローラの名前が出ていたし、看板やギフトショップの商品にはママの顔が印刷されていた。「セスとヒローラの水泳対決」は「ヘスワンブランドディア!」そのもので、サンバイザーをつけた汗だくの客は、このショーをみるために、北極星にひきよせられるように海を渡ってくるのだった。そんな観光客に、わたしは悪いニュースをきりださなければならぬ。

「ヒローラが亡くなりました」そういいながらわたしはあいまいなジエスチャーをする。ヒローラ・ビッグツリーとはなんの関係もない人みたいだ。「でも安心してください。わたしは代役のエーヴァ・ビッグツリーです。今日も世界クラスのアリゲーターレスリングをお目にかけてみましょう……」

観客は顔をしかめるか、わたしの肩にちよつとさわるかする。

「あつちにいる男の人、ほら、あの羽をつけている人。あの人があつたレスラーはきみのお母

さんだつていつてたけど」

わたしはじつと動かない。さしのべられる手がふるえる鳥の群れとなって降りてくると、目を閉じる。頬の濡れた髪を鳥のつばさが払いのけていく。どこかの子の母親がわたしのことを気遣って話しかけてくれると、わたしはこういうことにしている。「悲しんでいるひまはありません。ショーをつづけなければ」キーウィが本土の高校生相手にそつけない声でいつていたことだ。観光客のだれかがわたしを抱きしめようと腰をかかめると、わたしも笑顔をつくろうとした。チーフは「やさしい人にはやさしくしなさい、エーヴァ」といつていた。「ママのことをききたがるだろうからね」でもどうしたことか、だれもそんなことをきく人はいなかった。ママが病気で死んだことを話すとみんな興味をなくしてしまう。観光客はヒローラ・ビッグツリーがワニに襲われたという話をききたがっていたのだと思う。骨が砕けのどが裂け、血がどくどくと流れるようなズツとするおはなしを期待していた人たちは、「卵巣がん」という言葉をきいて興味深い反応をしめす。がんといいうのはあまりに平凡すぎて、きいている人は一瞬とまどうのだ。

「がんだつて?? それはひどいね。ママはいくつだったの?」

「三十六」

おばさまたちは「あら」とか「かわいそうに」とかいつてわたしをもつときつく抱きしめ、おじさまたちは二、三歩うしろにさがつていく。がんはまったく彼らの気に入らないみたいだった。

ヒローラの死を告げたあと、ほとんどの観光客は黙つてショーをみてくれた。それでもなかには金を返せといつてくる客もいる。なぜか近くから来ている人ほどひどく怒っているようだった。ピングとハイアライの会のおばさまたちは、ママの死は自分たちに対する詐欺行為だといわんばかり

にふるまった。「せっかくの火曜日のおたのしみだったのに！」髪を青く染めた女が泣きべそをかく。わたしたちは「セスとヒロラーの水泳対決」をみるためにお金を払ったのであって、コインドッグを食べながらおきなトカゲとこのうえもなくしょぼくれている子どもたちをみるためにわざわざ四十分ものあいだフェリーに揺られてきたのではない！

老人にとっては死なんて天気のひとつにすぎないのさ、とチーフはオッシーとわたしに説明した。雨天延期とおなじくらい平凡なできごと。「あんまりうるさくいうようだったらね、ワニの子をプレゼントしてやるといい」

文句をいう人たちが大嫌いになった。がさがさした口紅をつけたしわだらけの顔が怒る。年寄りくさい、ばからしくたわんだ日よけの帽子はつばだけが土星の輪のようにおおきい。死神の飛行機の乗客リストがみてみたいな。わたしはオッシーにそう耳うちした。飛行機に乗りこむ順番はなんでもこんなばかげたことになってるんだらう。

チーフは「だまれ老婆ども」という名前のおみやげセットを用意した。怒りくるう年配の方々をなだめるためにくぼられるこのセットには、発泡スチロールでできたワニの帽子（かぶるとワニに頭を食われているようにみえる）とフラミンゴのクリスタルネックレス、緑と琥珀色のセスのつまようじ五十本入りコレクターズケースつき、それにママのばらばら絵本が入っている。絵本のページをすばやくめくると、ママはむかしのアニメみたいに動いた。ママは水に緑のやぶれ目をつくって人工池のまん中に落ちる。あるときオッシーとこの本をみていて、逆向きにおなじくらい早くページをめくると、ママがすごい勢いでもどつてくることに気がついた。水面の泡は内側に流れてもとどりの静かな池となり、ママはかがやく弧を描いて飛びこみ板に着地する。窓が割れるのをま

きもどしてみているみたいだ。ガラスがくつつき、本の最初にもどつてくる。これをみたあとでまだ文句をいう人なんていないだらう。

しかし観光客はこれを見ると気がめいるようで、メッシュのごみ箱には何冊もの絵本が捨てられていた。ママの葬儀から一か月とたたないうちに、チーフはたくさんの人に年間パスの払いもどしを求められ、もつとたくさん常連客は、なにもいわずにただ来なくなった。

その年はママだけでなく、ソートゥースおじいちゃんまでが姿を消した。おじいちゃんはまだ生きていたけれど、ママが死ぬ一か月ほど前から本土に送られていたのだ。チーフがおじいちゃんを住ませたのは、〈沖のほうシニアコミュニティ〉という介護つき施設で、そうやって離れて暮らすのはすこしのあいだだけだとわたしは子どもは知らされた。島のごたごたをかたづけするまでのあいだだけ、とチーフはいった。わたしはさみしかったけれど、おじいちゃんはそうでもないみたいだった。本土に行く前は家のなかで何度も迷子になった。家族の名前はまだ覚えていてみいだったけれど、それもとまどきだけで、顔と名前は一致しない。記憶のスィッチは入ったり消えたり、切れかけた電球のきまぐれな光のようにまたたく。わたしたちが本土でおじいちゃんに会ったのは一度きりだった。引越してから数週間がたって落ちついた（らしい）ころ、〈沖のほう〉のキャビンで二十二分間をいっしょに過ごした。おじいちゃんのキャビンの窓からは、ガラス越しに丸く切りとられた海と低い防波堤がみえた。ポートに音楽はなく、生きたトカゲが壁を這ってしっぽをまいていることもなく、あかりはハロゲンランプだった。チーフはまたルーミスにつれていってくれると約束したけれど、〈ワニの穴〉を掃除してからとか、ポートを修理してからとかいってばかりで、結局十二月にはもうだれもせがまなくなっていた。

敵の顔をはじめてみたときのことはつきり覚えている。それは一月のある木曜日で、ママが死んでから十か月と二週間がたつころだった。その日は午後からおおきな嵐が島々を襲い、リビングルームはいつになく暗かった。わたしは六チャンネルで「アイ・ラブ・ルーシー」の連続放映をみながらうつらうつらしていて、ウサギの耳みたいなアンテナをつけたおじいちゃんテレビの画面には水紋のようなひびが入り、ソファの上でまどろむと五感がこんがらがり、嵐が家のなかまで入ってくる夢をみた。とつぜんテレビ画面が真っ暗になって、低いバリトンの声がひびいた。「ルミスに〈暗黒の世界〉がやってきました！」わたしは画面にくぎづけになった。チェックのベストを着た生徒たちが一列にならんで、細い道を通って巨大な遊園地のなかへと入っていくのを、カメラが追いかける。アナウンサーはその通路を「ヘリバイアサンの舌」とよび、スポンジとピンクの編み目でできたその舌はみるからにすべりやすい電動式の歩道で、何学年分かの子どもたちはそれに乗って三十フィートの距離を遊園地のなかへと吸い上げられていった。カメラはズームインして、ヘリバイアサン〉のなかの様子をちよつとだけとらえる。それはクジラのおなかの縮尺モデルで、タイマー仕掛けの緑の電気に照らされて、そんなものをみられないわたしには宇宙人のカフエテリアみたいに思えた。それからテレビはピンホールショットで乗客が舌の向こうに消えていく様子を映すと、また暗くなった。スピーカーからはクジラの消化器の音がきこえる。それからまたさっきの子どもたちが、「世界〉大好き！」といつせいに叫びながらネオンのチューブに吞まれていった。「なんだこりゃ」とチーフがいう。「こんなどうでもいいコマーションをつくるのに、一体いくらかかると思う？」〈スワンプランディア！〉は一度もテレビ広告を出したことがない。

〈暗黒の世界〉はルミス郡の南西、高速道路を降りてすぐのところにあった。カメラがうんと引くと、うろこ模様の駐車場がみえた。太陽系のようにぐるぐると建物を囲む駐車場だ。ヘリバイアサン〉の西の端はチェッカー盤みたいに手入れされた郊外の芝生に接していて、流れるようにつくられた溶岩はまわりの家々の車庫にまで達している。近くに建つ家はどれもちいさくて機嫌が悪そうにみえた。〈暗黒の世界〉は〈スワンプランディア！〉が提供できないものをいくつも持っていた。エスカレーターでの地獄めぐり、まっ赤な血のプール、ぐらぐらと煮えたつコーラ。それにアクセスのよさ。

「あんなことほんとにできるの？」とわたしはきいた。「町のまん中に遊園地を持つてくるなんて」チーフはもうテレビをみていなかった。ソファに深くうもれるように座ってブランドとコーラを飲みほそうとしているところだ。「あんなくそみたいなところに行きたいなんていいだすなよ、エーヴァ。いつたいだれが舌の上をすべり落ちるのに金を払うと思う？ あほらしい。セスのおなかのうろこをさわっておいで。ホンモノの怪物を持つているのはだれかってことを思い出すから」

〈暗黒の世界〉のグランドオープンから一、二週間しかたっていない一月のおわりの火曜日。その日、午前のフェリーが来なかった。二階建てのフェリーは平日の朝九時五分にルミス郡のフェリーのりばを出発し、十時をすこしまわったところにこちらに到着することになっている。このオレンジの船が、橋も道路も持たない〈スワンプランディア！〉と本土をつなぐ唯一のものだった。フェリー

はわたしたちの生命線で、観光客を運んでくるのもこの船以外にはない。本土からの距離は二十六マイルで、天気がよければ四十分の船旅は、悪天候では一時間半もかかることがある。この航路は開拓時代のなごりで、むかしはテンサウザン諸島にちらばったながれ者や入植者たちと本土をつなぐ役目になっていったという。テンサウザン諸島にはいまだに無人島が多く、むかしと変わらない三十五マイルの循環ルートに停留所は四つしかない。(スワンプランディアーン、バンの島、カーペンター島、それにアカワシ島フィッシングキャンプ。近所の人といえばバンの島でアボカド農園をいとなむジャネットイ夫婦だったが、かれらの家はエアボートで南へ十五分の距離にあった。

チーフはだれもないスタジアムでよつんばいになって、(ワニの穴)のポンプを調節していた。「一般市民用」の服のコレクションからひっぱりだしてきたと思われるTシャツには、アラバマ・カーディナルス「スポーククラフの名前」と書かれていた。さらびやかなひもやビーズや羽に飾られていない頭は、まばらに生えた黒い髪の毛のすきまから白い頭皮をのぞかせている。ふしようひげの生えた頬にはふたごのくたものが赤く熟して、やつれたシャーリー・テンブルみたいになえた。

セスは食べちらかすので、チーフは十日に一度は池の水を抜いて掃除をしなければならぬ。ワニのえさはルイジアナのブリーダーから仕入れていて、だいたい鳥や魚ばかりだけれど、たまにはちよつと変わったもの、たとえば冷凍のヌートリアやマスカラットやビーバーや馬なんかも与える。食事がすむとセスは骨と羽を吐き出す。ハリケーンのと、葉っぱが降りつもった池からちいさなる骨が出てきたことがあった。それはパイミたいな深いはちみつ色をしていて、その正体をめぐっては夕食のテーブルでもグリーンピースやミートローフの上で熱い議論がかわされた。

「サム、あれは島のシカにちがいないな！」おじいちゃんが大声を出す。

「ちがうよ、じいさん」チーフが反論する。「おれが思うにあれは犬の骨だ。かわいそうにちよつと泳ごうと思って流されて……そのソースを取ってくれる？」

「いけにえチキンの木曜日」は大人気の残虐アトラクションだった。セスたちは池から五フィートも飛びあがって、かかとから洗濯ひもにつるされた雲のように白いメンドリに食らいつく。つかまえたメンドリは水にせずめて、ぐるぐるともわりながら味わう。これは「死のたつまき」とよばれ、観光客にとつては絶好のシャッターチャンスだった。この儀式はソートウスおじいちゃんの発明で、その歴史は一九四二年にまでさかのぼる。わたしの家族は何世代もの子どもや年配の女性たちにトラウマを負わせてきたのだ。わたしたち姉妹は祖先から流血シーンへの免疫をうけついでらしく、オッシもわたしも、「死のたつまき」をみながら平気でビーナツバターとジャムのサンドイッチを食べることができた。

カチツという音がして透き通った泡がぶくぶく出てくると、チーフは「よし」と満足げにいつて池のへりからなかをのぞきこんだ。さつきまでチーフが立っていた台は水にもぐり、何頭かのセスがそのまわりをゆつたりと泳いでいる。道具入れをつけたベルトがチーフの汗ばんだ脇のすぐ下までずれ上がったままになっていた。

「チーフ！」わたしは飛びはねながら声をかける。「パパ、フェリーが来なかつたよ……」

チーフはイライラした視線をこちらに向けた。太陽はわたしのうしろにあり、わたしの背はそれをさえぎるには低すぎる。目がくらんで立ちつくしているチーフはひじまで泥のてぶくろをはめているみたいだった。

「いまいそがしいんだ。ガス・ワデルがドックから電話をかけてきたよ。乗客がいなくて今日は

フェリーを出さないんだとさ」

「テレビをみてきてあげようか？ 本土でなにか悪いことが起きたのかも」

「イライラさせないでくれ。テレビをみたければみればいいじゃないか」

池をきれいにしてしまうと、チーフは隔離用タンクをみにいった。そこには獐猛どうもうで扱いにくいアリゲーターが入れられている。そいつは片目で、とにかくいじわるで、ほかのワニだけでなく流木やスイレンの花がみえないほうの目に近づいてきただけでもかみつく。それはおそろしい上にみているとなぜか恥ずかしくもなる光景だ。わたしは無人のスタジアムでしばらくぶらぶらしていた暑い日で、セスたちは茶色がかったオレンジの藻のあいだをすりぬけながら泳いでいる。この藻はフロリダの暑さのなかではすさまじい勢いで繁殖し、一晩で池をカボチャ色に染めてしまうこともある。ワニ以外はなにも動いていなかった。

「アリゲーターはペットじゃないんだ、エーヴァ」チーフはいつもいっている。「こいつらは皮のケースに入った食欲のかたまりだ。セスが愛情にこたえるなんてことはないぞ」

それでもわたしはワニが好きだった。しつぽにかけて細くなつていくそのおおきな体が大好きだった。もちろん宇宙人みたいな目とまえばれもなく突進してくるスピードはこわかったし、チーフがいたるところにつるした板に書かれていたことはほとんどが正しかったと思う。

アリゲーターはアラビア馬よりも速く走ります！

食べられないように気をつけて！ ワニの体は時代遅れだが、食欲は旺盛！

セスは一億八千万年の経験を持つベテラン兵！

「今日はショーがないんだよ、おばかさん」わたしは柵ごしにワニたちにいった。ビー玉の雨を降

らせて、それがセスの黒い背中で惑星のように回転するのを見ていた。この遊びはチーフからも許可を得ていて、なぜならビー玉にはセスの消化を助けるはたらきがあるからだ。ニワトリが小石を使うように、ワニはビー玉を呑みこんで砂のうでこすり合わせ、獲物をくだく。ワニ類にビー玉を食べさせると水のなかでうまくバランスをとって浮けるようになるのだ。ワニたちはどのくらいのビー玉をおなかに入れておけばバランスが保てるかということを、生まれながらに正確に知っているみたいだった。

腕時計をみると、いつもならショーがはじまって五分ほどたっているころだった。古い飛行機からとったケーブルでつくったハーネスを持ってチーフが池に入っていく、レスリングの相手を選ぶ。チーフは相手のワニを「尊敬すべき負け犬」とよび、錆ついたハーネスをセスの鼻面にひっかける。水のしたたる黒いセスが、鼻をしばられて魚のように身をよじる、ほかのワニたちはぬかるんだ池をゆったり泳ぎつつける。セスはみんなワニの無意識のなかにいて、あわれみなんて感じない。

チーフがセスをステージにひっぱっていくと、いよいよ本格的にたたかいはじまる。セスは前に飛び出して、チーフを池に落としてしまう。チーフはすぐに這い上がってくる。水しぶきをあげてこの綱引きがくり返され、そのあいだ観客は人間の勝利を願って大声援を送る。アリゲーターレスリングで正式に勝利するには、両手でワニのあごをはさみこまなければならぬ。セスの口を閉じさせるのは大変で、ママは女の子の手がちいさくて、指をひろげてもピアノのオクターブにとどかないくらいだから、生まれつき不利なのだといっていた。

しかしセスには生態学的に興味深い特徴がある。あごを閉じるとき、ワニは一平方インチあたり二二五ポンドもの力——これはギロチンに匹敵する——を発揮するのに対して、あごを開く筋

肉はとても弱いのだ。レスラーはこの性質をうまく利用して敵をたおす。閉じた口をこぶしに収めてしまえば、セスが口をまた開くことは不可能に近い。安物のリボンでだって、四百ポンドのオスのあごをしばっておくことができるのだから。

もちろん、セスのあごをただ閉じさせるだけがビッグツリーのショーではない。観客が集まってくるのは、わたしたちがほかにはない危険な芸をみせるからだ。ママが死ぬ前、わたしは高度な技をいくつか教わっているところだった。たとえばビッグツリー名物の「あご固め」。これは自分のあごと首を掛け金のように使つてU字型のハンドバッグみたいなセスのあごをはさみこみ、幅のひろい鼻面をのどに押しあててキスに失敗したときのような体勢をとるものだ。「静かな夜」というのもある。ワニの目を両手でおおつて鼻にはテープを巻き、ママかチーフかおじいちゃんの手を借りてワニを裏返しにする。わたしたちが「ワニを眠らせる魔法」とよんでいたものは、実はワニの内耳と脳をつなぐ耳石のはたらきをさまたげていただけだったのだと数年後に知った。ワニは失神していたのだ。

こういうと動物愛護団体からクレームがきそうなので、チーフがいつていたことをつけくわえておきたい。テープを巻こうがひっくり返してしまおうが、それは人間にとつて有利なたたかいは決してならないのだ。足をばたばたさせながら身動きのとれない「眠り」へと落ちていくときでも、ワニは圧倒的な強さをほこっている。何百万年ものあいだたくわえてきた凶暴さには、人間はとうていかなわない。セスは何日もびくりとも動かずに過ごすことができる。そうやって岩の上で死んだふりをしながら獲物を待ちかまえて、カメやトキが油断したときに全速力で襲いかかってばくりと呑みこんでしまう。セスの獰猛さを長い時間おさえこむことは不可能だ。一度だけ「静かな夜」を

やってみたときは、途中でバランスを取りもどしたワニにしつぽの一撃をくらい、体の右半分があざだらけになってしまつて、ママはチーフにわたしにはこの技はまだ早すぎるといった。あのころとくらべて、わたしはおおきくなったと思う。スタンドから観客が消えたいま、早くわたしがあの技を披露できるようにならなければならない。

チーフによると、観光客は不公平なたたかいをみるためにお金を払う。生きるか死ぬかのシーツゲームだ。「弱さを演出する」というビッグツリーの戦略を、わたしはもうずっと前にチーフから教わつた。セミノール族の優秀な戦士たちもこの方法をもちてきたという。真の王者は羽かくしをしたり利き手をしばつたりして自分にハンデをつけたものだ。「弱さ」をみると観客は羽でくすぐられたような快感をおぼえる。「弱さ」によつて観客を座席にくぎづけにすることができる。ちいさなレスラーがアリゲーターの巨体に向かつていくのを見て、客はレスラーが負けるかもしれないと思う。この心理を利用して、たたかひの緊張感を風船みたいにスタジアム中にふくらませるのだ。ショーには電気をおびたようなおそろしい瞬間があつて、そんなとき、わたしはなにか不吉なことが起こりそうな予感が運命の黒く透けた風船となつて、チーフがいつた通りにヤシの木のあいだにただよっているのを想像した。

「本土の住人たちには、ワニがただのおとなしい恐竜ではないということを教えてやらないといけないぞ」チーフはよくわたしにいきかせた。「乾いた土地でひまをもてあまして、死んだように無気力になったやつらはロボットでもみるようにステージをみているんだから！」チーフは首を振る。「人がワニに負けるかもしれない、そう思わせてやるんだ。そうすればものすごくおどろくから。ワニに勝つて、ショーにも勝つんだ」

でも、そんなショーをもう一度みせることはあるのだろうか。昨日のショーがレスリングをして、本土の人たちをびつくりさせる最後のチャンスだったのかも知れない。わたしは〈ワニの穴〉の柵をのぞいた。軽い小さな袋にふれて、ビー玉がほとんどなくなっていることに気がついた。エーヴァ・ビッグツリー、メロドラマみたいに感傷的になるのはやめなさい！ レスリングはまたできるに決まっているじゃないの。今日はたまたま人がいないだけ。観光客は帰ってくるわ！ ママのきびしい声を想像してみる。それから頭の悪そうな顔でこちらをみている池のワニたちにもおなじ声でいつてやった。「たくさん食べときなさい。だれも来ないんだから」青と灰色のビー玉が固い泡のようにうろこにひっかかっている。おおきな黄色い玉はセスのごつごつした肩の上で転がり、おもちゃの太陽みたいにみえる。それからビー玉はすべて水の底にしみ、胃石となる。

「エーヴァ、なにしてるの？」

チケット売り場の上に取りつけられたスピーカーから、オッシーの声が飛び出してきた。「あはは、ビー玉をなくしたの？」

二週間がたった。わたしたちは一日一回のレスリングのチケットも売りきることができないので、だれがいつ来てもショーをするようになった(まだ何人か、濃いピンク色の背をした古い旅行ガイドをにぎりしめてとまどいながらやってくるヨーロッパ人がいて、チーフが話しかけるとナンデスカ?とかドデスカ?とかいつていたのだ)。ショーは二十分短くすることにした。観光客ははじ

め同情の目を向けるがその注意もだんだん逸れていつて、視線はやがてスタジアムの上空を^ためらうに飛びまわる。ママとおじいちゃんのないショーは、ひどく不完全に感じられる。観光客にはわかりつこないとチーフはいうけれど、無表情のセスでさえ、なにかが足りないと感じているみだだった。ある木曜日のこと、チーフは機嫌が悪く、ショーの最中にあくびをしている観光客をみつけると、おおきなうなり声をあげてセスを水のなかに投げ入れてしまった。それから「ジャジャーン」といつて立ち上がる。「これでおしまいです」

わたしたちはこんなものをまだ「ビッグツリーの大レスリングショー」と仰々しい名前ですんでいた。

こうなるとこのあいだまで軽蔑していた人たちがさえ、いないときみしいと思うようになってくる。ミシガンからきた色白の老夫婦。氷のように透き通った肌をして、雄牛の群れのようにカメラの黒いストラップのくびきにつながられた外国人のカップル。父親たちは汗のしたたるひげをふるわせ、若い母親たちはけたたましい音を出すラジオみたいな赤ちゃんを抱いて、〈スワンプカフェ〉につづく沼の上の道を行ったり来たりする。

家族連れはどこへいつたのだろう。一瞬にしてみんな消えてしまったみたいだ。彼らは〈スワンプランドミア〉を支える生きものだったのに、いまではパンサーよりもめずらしい種になっている。その代わりに、赤い目をした男たちが土曜日のショーに現れるようになった。うしろから子どもがついてくることのない、ひとりぼっちの男たちだ。島につく前から酔っぱらっていて、くさい息を吐きながらフェリーを降りてくることもある。ルーミス郡のフラミンゴマリナーナからほんこつ船を自分で運転してくる男もいた。彼らに共通しているのは、トラムのツアーやアリゲーターレス

リングよりも、安いビールと煙のしみついた陳列棚にならべられたカエルの足のフライのほうが好きだということ。〈スワンプランディアア〉は、どうやら平日の夜にへべれけになるのいうつつけの場所という評判を得ていたらしい。ギフトショップの脇で立ち小便をしている男をみつけたこともある。五分も歩けば鍵のついたトイレがあるのに、壁で用をたしているのはおどろいた。わたしはそんな男たちが大嫌いで、チーフも赤目の集団が来ているときはわたしにレスリングをさせず、ひとりでシヨールをした。財布を持ってさえいればどんな客でも歓迎するチーフが、赤目に対してはつめたかった。これも〈暗黒の世界〉のせいだといっていた。

「家族連れはもどつてくるさ」ひとくあやしげな集団がシヨールをみにきた日の夜、チーフがいった。男たちはビールを飲みすぎて、ガスとキーウイが手を貸してやらないとフェリーにもどれないほどだった。そのうちのひとりは博物館の裏の植え込みで嘔吐していた。もうひとりはチケツト売り場の窓ガラスに顔を押つけて、ひじをバツタみたい曲げてオツシーに妙なジョークをささやきかけていたので、離れたところからはガラス越しにキスをしようとしているようにみえた。チーフはドックから男たちに向かって大声で怒鳴っていたのに、連中が行ってしまったあとにはわたしたちに怒りはじめた。「ちよつと落ち着きなさい」といいながらこわばった手でオツシーの肩をたたく。「もうあいつらは帰つたんだから。家族連れがもどつてくるまで、家賃を稼ぐためにはあんなやつらでも島に入れないといけない。でも悪い天気みたいなものだよ。わかるね。風が吹けば天気も変わるさ」わたしは眠れなかつた。太陽がしずんだからといって状況が変わるわけではない。〈暗黒の世界〉がオーブンしたままで、ママが墓に入ったままだとしたら、どうやって家族連れを取りもどすのだろうか。夕食のあいだ、空には口をへの字にまげているような三日月が出ていた。チーフは黄色いつ

まようじで奥歯をほじり、キーウイは本を読み、オツシーはうなだれたままみんなのお皿から食べものをとった。そして指でママの青いテーブルクロスについた無色のごはんつぶを拾い上げる。わたしはあの黒い風船となったわたしたちの運命について考えずにはいられなかつた。うすい膜が張られた空気の球が、ヤシの木のぎざぎざの向こうにはつきりとみえる。月を透かしたその風船はみえたけれど、わたしたちにこれからなにが起ころうとしているのか、想像もできなかつた。